
らき すた～夏休み前の話

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すたゞ 夏休み前の話

【ZPDF】

Z7560F

【作者名】

ミナクア

【あらすじ】

らき すたゞ 夏休み前の話です。

第1話

夏休み前の最後の登校日。天気のいい朝の教室。明日から夏休みといふことでみんな浮かれよう話をしています。いつもの朝のざわめいた教室の雰囲気よりも浮かれた感じ。こなたたちも例外でなく、こなた、かがみ、つかさ、みゆき達は机をかこんで話をしています。

こなた：（下敷きをうちわ代わりに使い、涼しげな顔で）「いや～、ようやく明日から夏休みだね～。長かった。この日が来るのをどんなに待ち焦がれたことか。特に昨日なんてす～ごく長く感じたよ」

つかさ：「そうだね～。そういえばこなちやん、この2・3日はやわそわしつぱなしだったよ。」

こなた：「そう見えた？」

つかさ：「うん。変なテンションの日もあつたしね。」

かがみ：「（からかうように）こなたは普段から変なテンションじやない」

つかさ：「む、お姉ちゃん……」

こなた：「夏休みが近づいているんだから変なテンションになるのは仕方ないよ。休みに入つてからも嬉しいけど、入る前が一番わくわくするよね～。」

つかさ：「うんうん、それよくわかるよ～。ケーキとかでも食べて

かがみ：「なるほどね～。そういう感じか。私もなんとなくわかる
かな」

こなた：「ほうほう。かがみんはどんな感じで？」

かがみ：（ちよつと考へて）「そうねえ・・・宝くじを買ってもし
1億円当たつたら、服を買って液晶テレビを買って・・・なんて
考へてたりするのってすげくわくわくするわね～」

こなた：（何も言わずに）ヤーヤして、かがみを見る

かがみ：「・・・ってなんて田で見るのよ～何か言いたそつね
「

こなた：「いや～、あいかわらずかがみは即物的といつか現実的と
いうか妹と違つてずいぶんとリアルなわくわく感を語つてくれるな
あと思つてね～」

かがみ：「・・・現実的で悪かったわね～」

こなた：「いやいや。別に悪いことじゃないから。むしろかがみん
はこうでないと。妹は夢見がち、姉はしつかりと現実的。こういう
キャラ設定のリアルギャルゲを田の前で見れていると思つたら感謝
したいくらいだよ。（つかさは困つたように笑い、かがみは、何い
つてんの？という顔をする。こなたは気にせずに話を続ける）まる
でクラナドのあの姉妹のような・・・そうだ。かがみんはこれから
イノシシの子供を飼つたらどうで、つかさは占いを趣味にするの。
まさにリアル萌えキャラじゃない。」

かがみ：「はあ？ なに言つてゐるの？」

こなた：「かがみんとつかさのキャラ設定だよ。わかんないならい
いか・・・とにかく夏休み前特有のこのワクワク感をなんてあらわ
したらいいんだろ？ ね・・・。（軽くに）きりこぶしをつくり、演説
口調で）私、泉こなたのここ2・3日のやる気はほかのひとの30
分の1以下だつ。しかし、今日まで学校に来ることができたのはな
ぜか？ 夏休みがあるからだつ！ 夏休みが待つてゐるからなのだあつ
！」

かがみ：「まゝたアニメのネタかなんかか？」

こなた：「ギレンの演説だね」

第2話

かがみ：「知らないわよ。アニメもいいけど、今年は高校で最後の夏休みでしょ？ワクワクするのもいいけど、受験の準備とかあるじゃない。もうちょっと気を引き締めなさいよ」

こなた：「これだからかがみんは・・・。夏休みはこれから始まるんだよ？楽しい夏休みをそんな風に構えて迎えちゃ 夏休みに失礼だよ。充実した夏休みを迎えるには自然体で入らなきゃ」

かがみ：「そうなの？」

こなた：「そうだよ」

かがみ：「ふ～ん。じゃああんたはどんな風に夏休みを迎えるつもりなのよ？」

こなた：（胸を手のひらで叩きながら）「私は決まってるよ。まず思い浮かぶのはマンガを読んだり、アニメを見たり、ネットゲをしたり・・・もちろんバイトもやるし、かがみんとも遊ぶよ」

かがみ：「なによ。いつもと変わらないじゃない」

こなた：「それが自然体なのだよ」

かがみ：「自然体つて・・・私と遊ぶって言つてるけど、遊ぶんじやなくて出された課題を家に写しにくるだけでしょ？」

こなた：（びくつとして）「さすがかがみん、察しがいいねえ」

かがみ：「あんたの考へてる」となんて大体わかるわよ・・・。
あ、いい年をした女の子が「いやつてそろつてるの」と、なんで朝からアーネの演説やら、こなたの予定なんて聞かなきゃいけないのか
しら・・・（力なく机に体を預ける）もつとあるでしょ？夏休み前
らしい話題が。たとえばみんなでプールに行こうとか、花火しよう
とか」

こなた：「まあまあ・・・（やつこねばみゆきさん）話を振つてな
いな）ねえ、みゆきさん」

みゆき：（口ごもって話を聞いていたが）「なんでじゅうか？」

こなた：「みゆきさんは夏休みつてどうやつてすいすの？やつぱり
受験に向けずつと勉強するの？部屋にこもるの？私たちとは遊ん
でくれないの？」

みゆき：（笑いながら手を振る）「いえいえ。ずっと勉強をするわ
けではないですし部屋にこもつたりもしませんよ。もちろんこなた
さん達と会つて遊んだりしたいです」。

こなた：「じゃあどうんな風に過ごすの？」

かがみ：「私も聞きたい」

みゆき：（落ち着いた口調で、軽くひとつ咳払いをして、人差し指
を立てながら、ここにかに話す）「そうですね。私が立てている計
画では、夏休みは勉強で苦手な部分やしっかり理解していない部分
をマスターしようと思つてこるんです。わからないところをそのま
まにしておくとあまりいいことはないですからね。（みんなうんう

んと頷く)。どのあたりが苦手なのかはそれぞれの教科”」とピッタリアップしていますのでそれをこなしていくだけですね。今のうちに苦手な部分を克服しておいたら秋から冬にかけてスムーズに勉強が進むと思つんです。(みんな頷くがあまりに想像より濃いので微妙に引き気味になる) ちょうどその時期は受験の前なので、とくに大事な時期ですね。ですから午前中に苦手を復習、それから夜は寝る前に夏休みの課題をちょっとずつやっていくという程度ですよ。私も自然体で夏休みに入る感じですね」(にっこりと笑う)

こなた、つかせ・(目を丸くする。これだけきつちつ計画を立ててそれを自然体といつのかつ)

みゆき・「あと、お昼は自由な時間にして自分の趣味をやってみたり、それから怖い

ですけど・・・途中でやめてしまつた歯医者さんにもいかないといけないです。あとは皆さんとも一緒に遊んだり・・・そうそう、夏休みは色々トイメントもありますしね。ぜひ誘つてください。・・・つて、みなさん、どうかされました?」

こなた：（なみだ目でポン、とみゆきの肩を叩く）「夏休みが終わって、秋から冬にかけてのことなんて考へてもなかつたよ。冬口（の）ことぐらいしか……。みゆきさんのお話を聞いてると自分が小さく思えてきたよ……。胸とか、身長だけじゃなくて」

つかさ：「私も～。来週何しようかな、って言つてからしか考へてなかつたよ～。ゆきちゃん、や～」

みゆき：「（赤くなる）やんな」とはなこですよ」

かがみ：（こなたをちょっとからかう感じで）「こなたの場合、みゆきより大きいのはオタク度くらいなんじゃないの？」

こなた：「むか～。なんですよ～。でも、あたつてるから、反論できない……」

かがみ：「でしょ～。こ～じやない、あんたは勉強しなくても一芸入試で変な顔をすればきっと合格出来るわよ、あれは強烈だつたわ～（みんな思い出し笑いをする）あんたはず～」

こなた：「こんだからね」

こなた：「それ、諒めてないから……。そういうえばさ、かがみは夏休みは必ず「予定」するの？」

かがみ：「私は……やつねえ。ま、勉強したり、あんたと遊んだり本を読んだりかな」

こなた：「平凡な夏休みだねえ」

かがみ：「つるさんこわねー！」

つかせ：「（言えな）つ。お宣近くまで寝て、あとはテレビを見たり、おねえちゃんに宿題を見てもらつたりするくらいの夏休みなんて言えないよー。聞かれたくないなあー）」

（ちょうどその時教室に隣のクラスの男子が入ってきて、かがみがいるのを発見する）

生徒A：「お、いたいた。おーい、柊、先生が呼んでるだーー」

かがみ：（時計を見てあわてる）「いけないつ、職員室にいかなきやいけないんだつた。みゆきもこのクラスの代表でいくんだよね？」

みゆき：「（時計を見る）「ええ。そろそろ全校集会も始まりますし、私もむづづ職員室に行こいつと思つていたんです」

こなた：「何かあるの？」

かがみ：（立ち上がりながら）「まあ色々とね。雑用を任されてるから。学級委員は面倒だから。じゃあみゆき、一緒に行こつか。一人とも、また後でね」

みゆき：「はーい。それではお二人とも、失礼します」

こなた：「あいよー。こいひー」（ゆる〜く手を振る）

つかせ：「こいつらひしゃーー」

第4話（前書き）

ちょっと百合百合した描写があります。
苦手な人は今回の話はパスしてください。

(かがみとみゆき、職員室へ向かう)

かがみ：（廊下を歩きながらみゆきと話をする）「ふう。すっかり忘れてたわ」

みゆき：（回憶するように頷いて）「楽しい時間を過ごしてみると、いつの間にか用事を忘れてたりしちゃいますよね。わかりますよ」

かがみ：（ニガ笑いを浮かべて）「あ～、あの不毛な会話が楽しい時間つてこうと語弊があるかもしけないけどね・・・でもみゆきって、しつかりしてるよね～」

みゆき：（照れたよう）「せつでもないですよ。わたしなんかは全然しつかりしてないですよ。お恥ずかしながら」

かがみ：「いや、しつかりしてるので。夏休みに入る前なのにちやんと計画も立ててるし・・・。（廊下を見回し、誰もいないことを確認する）つてこうかさ、夏休み、私に会ってくれないの？」（ナリナリで、みゆきの手を握り、立ち止まる）

みゆき：「え？ かがみさん？・・・」

かがみ：（頬を上気させ、潤んだ目で）「みゆき、わたしキスしたいかも」

みゆき：（困惑して）「えつ・・・ほかの生徒がくるかもしれないですよ」

かがみ：（値踏みをするような目つきで）「ふーん・・・人がこな
ければいいんだ・・・」

みゆき：「もうこいつわけじゃないですけど・・・急にビーツしたんで
すか？・・・きやつ」

かがみ：（みゆきの手を引いて、トイレに入る）「ここならだれも
来ないわよ」

みゆき：（おろおろとして）「それはそうですが、先生方が待つ
てますよ。時間もないですし・・・（壁に押し付けられる）」

かがみ：「（耳元で）10分くらいなら遅れたって構わないわよ・・
・（軽くキスをする）嫌？」

みゆき：「（うつむいて）嫌じゃないですけど・・・急にどうされ
たんですか？」

かがみ：「明日から休みで、今日は授業もなくて全校集会で下校で
しょ・・。なんかうれしくて昂ぶってきたのかな。理由なんてそん
なもの・・・それに『こなたさんたちとも遊びたい』つていってた
でしょ。なんでこなたの名前が出て、私の名前が出なかつたのかす
ごく悲しかつたんだから（ヤンデレっぽい目の色に変わつて）・
・チユツ、チユツ」

みゆき：「んつ・・・」

かがみ：「ふふ・・・す」くい声。甘くて・・・声出したら人が来
ちゃうんだったね。」「めん」「めん・・・今日はお風には終わるし、
帰りはこなたたちと帰るから、帰つたらみゆきの家に行くね。続き
はそこで・・・ね？」

みゆき：「わかりました・・・あの・・・職員室に・・・行きませ
んか・・?」

かがみ：（携帯を取り出して時間を確認する）「やつね。もう一〇
分ぐらじ経つし、あんまり遅れちゃうと変だもんね」

みゆき：「ええ。やうですね」

かがみ：（ハハハ）「わ、行きましょ。職員室で先生が待つ
てるわよ」

みゆき：（表情を読み取るようにかがみの顔を見ながら）「かがみ
さん」

かがみ：「なに?」

みゆき：「私の思い違いかもせんが・・・朝、私がこなたさ
んとばかり話していたから、もしかして妬いちゃいました?だから
こんなことしようと思つたんぢやないですか?」

かがみ：（明らかに動搖しながら）「や、そんこと、じやない、
そんなこといやいわよ。なにこつてるのよ」

みゆき：（にっこり笑う）「やうですか?でもなんか、しじろも
どうになつてしません

か？・（くすり、と笑う）そういう強がりなところがかわいいのか
もしごませんね

かがみ：（恥ずかしくてちよつとつづむく）「もう。なに訳のわ
かんないこといつてるのよつ。早く行くわよ。先生が待ってるでし
ょつ」（そういつて早足で先に行いつとする）

第4話（後書き）

かがみとみゆあわせの絡みです。

この辺はなんとなくの妄想です。

すいません・・・

(かがみとみゆきが去った後の教室)

こなた：「いやー、生徒会といつか、学級委員といつかああいう人たちは大変だねえ」

つかさ：（うなずく）「こうこうとやらないといけないからねー」

こなた：「（机にぺたっと倒れ掛かって）私なんかは生徒会には興味はないんだけどね。面倒くさいし。何より夜遅くまで学校に残つたりしなくちゃいけないし。」

つかさ：「そりなつたらこなちゃんアニメ見れなくなるもんね」

こなた：「うん。（ふと思い出したよつて）そりこねばせ、よくアニメとかに生徒会の役員が出てたりするじゃない」

つかさ：（困ったよつて）「やつなの？」

こなた：「うん。えーとね、フルメタもそうだし、極上生徒会、なんていのものもあったよね。舞HIMEだって生徒会の人たちが出てたし、最近のラノベだったりとか、生徒会の一存、なんていうのもあるよね」

つかさ：「こなちゃん詳しいねー。そんなにあるんだ」

こなた：「やっぱ学園物のお話には生徒会っていうのは欠かせないもののかねえ。生徒会があつたほうが話が盛り上がるし、何よ

り生徒会に所属している登場人物がスパイズになるつて」ともよくあるしね」

つかわ・「どうなんだろ?ね~」(立正にしながら)

こなた・「どうなんだろ?ね~」(体を起こして腕を組んで考え込む)

(ふたりともじばりくの沈黙。こなたは話し終えたままの表情で、つかわはにじにじしたまま)

こなた・つかわ・「ね~・・・・」

(こなたの意味でぐだぐだで、話は途切れる)

(黒井先生が教室に入つてくる。みゆきは手にプリントをたくさん抱えている)

黒井先生・(教壇に立つて教室を見回す)「みんな~そろつてるか~?おらへんやつ、手を挙げてや~・・・よし、全員出席やな~」

(こなたながら、呵呵大笑する)

こなた・(先生、わすがに)そのギャグは笑えないよ・・・つていうか、最後の日へりこ、ちやんと出席とのつよ・・・

黒井先生・「なんや~みんな辛氣臭い顔してから」・・・今日が終わつたら明日から

夏休みや。若者は若者らしう、もっとぱーっと明るい顔とかなあかんでえ・・・つてことだ、いまから学年集会や。一応プリント

トや～配つてから体育館に集合になるんで、高良、配つてや～」
やつて、みゆきにプリントを配るよつて配せやる）

こなた：（なんだか、みゆきさん、少し顔が赤いよね。熱もあるのかな）

つかせ：（やうだね。ちょっと足元もおぼつかないし……）

みゆき：「はい。それでは配つますね。……ひとと……ひとと。
・」（転んでスカートの中が見える。クラスの視線を独り占めする）

こなた：（ぱんつはいてない！？）

つかせ：（……あれ？ 田の鑑観？）

クラスの田が一瞬そこへ行つて、小さこやわめきが一瞬で静かになる。

こなた：（みゆきさんがノーパンな訳ないし……ですが歩く萌え要素のみゆきさん……）んなとこりでもパンツはいてない的な構図を見せてくれるとは……）

みゆき：（顔を真っ赤にして）「すみません、今から配りなおしますね」

黒井先生：（配り終えたのを確認して）「はつははは、高良はドジつ子属性やの～。よ～し、みんな受け取つたな～。それじゃいまから体育館にいくで～」

(体育館にて集合して、並ぶ)

「なた…」「うひこひ時ひでや、誰か倒れるんだよね」

つかせ…「わかるわかる。よくあるよな~」

「なた…「で、倒れるのは最近だと萌えキャラなんだよね」

つかせ…「それはわからな~かも…」

「なた…（遠ご田をしながら）「みゆきわく、倒れないかなあ…」

つかせ…（困ったよひ）「うひがひせこひな~のかなあ…」

「なた…（遠ご田をしながら）「まひせこひな~のかなあ…」

つかせ…「（困ったよひ）「ながやこ…」

（なんだかんだで終業式はしつがなく終わる。そして教室へ戻った後、ホームルーム。

通信簿を配り、終了）

黒井：「よし、これにて終了。みんな夏休み中に怪我をしたついたらあがんで。何があつたら先生に連絡をすること。それじゃ、せじゅ

(クラスの全員、席を立ち、がやがやとした教室になる)

こなた：(つかせとみゆきのと)「ひいて。背伸びをすね」「こや
～、終わったね～」

つかせ：「うん、終わったね～」

みゆき：「ええ、終わりましたね～」

かがみ：(こなたのひじから)「終わったわね～」

こなた：「うおっ。かがみん、いつの間に後ろに」
「ひいて」

つかせ：「あ、お姉ちゃん。ホームルーム終わったの?」

かがみ：(腕を組んで勝ち誇ったよう)「ほんのさつきね。一緒に帰ろうと思つてさ。それに、あんたたちの通知表がどんなものだつたか興味があるしね。みゆきはともかく、こなたはゲームとアニメばかりで、つかせは寝てばかりだったから気になつてさ。こなた(意地悪そうに笑う)もしかしてオールーか?」

こなた：「むかっ。アニメのお馬鹿担当キャラじやあるまこし。つかせはともかく、私はそんなに悪くないよ?」

つかせ：(皿を丸くして)「ええ。こなたさんのへせこ～」

かがみ：「ふ～ん、セイジが壁のない、見せじ、ひそむことよ、あなたの通信簿」

こなた：（恥ずかしさにうつむき、両手で通信簿を持つて）「これ、受け取つてくださいこひ」

かがみ：「馬鹿。ワープレーターじゃないんだから・・・（受け取る）どれどれ・・・（田を通す、そして眉をしかめる）・・・ていうか、あなたを、誇りしげに見せるほどの成績じゃないわよ？」

こなた：「こやこや、これほりれでこんだよ。一応5があるでしょ」

かがみ：「あるこはあるけど」

こなた：「それが大事なんだよ。これでお父さんワープレーターを買つてもらえるからね。

これより一個5が多こと、PS3になつてたんだよ。買つてもうつたところであんまりいいゲームは出でないからね。ちなみにこなたり一個少ないと、X BOX」

かがみ：「（突つ込む）お前はPS3のために成績を調節したのか

「

こなた：「まあまあ、こいじょない。それより、かがみはどうな

の~見せ~る。・・・・・いや~（かがみから通信簿を奪~て取~る）ふ
~ん・・・・（じつ~うと勝め~）なかなかのものだね・・・・

かがみ・「（勝ち勝つたよ~）ま、あなたとは違ひわ~ね
「お~わ~い違ひ違ひ

こなた・「でもみゅ~わ~こ~じやな~に~。みゅ~わ~、見せてあ
げてよ」

みゅ~き・「え? わたへ~ですか?..ビーブ~（かがみに遠慮がちに手渡
す）」

かがみ・（こなたのときとけがこ~、じつへつと見てこ~）「...
へえ~、わ~すがみゅ~き~」

みゅ~き・（顔を赤くしながら）「そんない~とありますよ~

かがみ・「（両手を腰に引いて、胸を張りながら）わ~すがでしょ。
や~ひ~ぱ~りみゅ~わ~こ~よ~な~」

かがみ・（みゅ~きの通信簿から手を離して、こなたを呆れた様子で見
ながら）「じ~う~お前が誇らしき~に~」

つかせ・「え~、ゆきあわ~ん、す~」の~・・・私にも見せて見せ
て（かがみから通信簿を受け取る）・・・わ~、う~しか~い~ね~・
お~姉~ちゃんも・・・す~こ~ね~。ほ~と~ど~じ~だ~」

かがみ・「あ~、たいした~と~ないわよ。で、あなたは~だつ~の
つかせ」

つかさ：（両手を胸の前で振りながら）「ええっ？ 私はほら、お姉ちゃん」と違つてマイペースだから。あまり勉強もしてないし。だからあんまり良くないよ。えへへへへ。（困ったように笑う）

かがみ：「そうよね～。こないだのテスト期間中も、夜、私がトイレに降りて行つたら、台所の明かりがついてて、冷蔵庫を漁つてるとつかさの姿をみるのはショッちゅうだつたわ。『たこわや、たこわや』なんていいながら」

つかさ：「（真つ赤になつて）ええ～。それは、あの、お姉ちゃんがテスト勉強で疲れないよう、なにか夜食でもないかな～なんて思つて……。それに、なんかほら、夜更かしつてなんか楽しいからね～。ついつい部屋の中をうろうろしたりして、勉強があろそかに……えへへへ」

かがみ：「（やれやれ、といつた仕草）苦しい言い訳ね～。ま、もつとも、つかさの作つてくれた夜食は結構美味しかつたけどね」

つかさ：「（焦り気味に）でしょ、でしょ」

かがみ：「（素にもどつ）それはいいから、通信簿見せなさい」

つかさ：（泣きやうな顔で）「見せないと駄目～？」

かがみ：（やれやれといった表情で）「家に帰つたらさりげなく判るんだから。ほり、見せなさい。（つかさの通信簿を奪い取る。つかさ、しょんぼりとした様子になる）……どれどれ……家庭科はいい

わね・・・あとは・・・はあ。（ため息をつきながら通信簿を返す）
・・・だからいつたじやない。ちゃんと勉強しこなないと酷い成績
になるって」

つかさ：「（うなだれて） そりだよな、『めんなさい』

かがみ：「（首を振って） まあいいわ。次の学期は私がちゃんと勉
強教えてあげるから

つかさ：「うん、『めんなさい』」
やん

かがみ：（照れしそうに顔を上げる）「あんたもしつかうついてくるの？」

つかさ：「うん、『めんなさい』」

かがみ：「頑張んなさいよ」（こいつ笑う）「

こなた：（黙つて笑いながらかがみをじっと見る）

かがみ：（視線に気づく）「何かいいたそうだな」

こなた：「いやー、やはり姉妹仲がいいですねー」

かがみ：「普通よ普通」

こなた：「あと、テスト期間中に体重を気にすることが多いなーと思つたらそりいう理由があつたんだなーって。なんだかんだ言って結構食べてますなー。夜食は太るよー」

かがみ：「ひさこわねつ！喧嘩売つてんのかつ」

こなた：「（あやー、と逃げる仕草をしながら）おー、怖いねえ…
…とこのみゆきさんはいつも11時には寝るみたいだけど、テスト期間中も同じ時間に寝るの？」

みゆき：「やうですね。私は基本的にそんなに遅くまでは起きられないんで…。
その代わりとこっては何ですが朝少し早起きをして勉強をしますね」

こなた：（感心したように）へー。朝の勉強なんて考えられないよ。
夜中までネットゲやつたり深夜アニメ見てたら朝はぎりぎりまで寝ないと眠たいよ」

かがみ：（すばやく突っ込む）「ちよつと待て。試験期間中の話だ
ろつ。勉強はどこに行つたんだ」

こなた：（必死に取り繕つ）「もちろんやるよ。勉強の合間にネット
ゲとかアニメ見てるだけだもん。夜型だからちよつとその辺活発にな
るだけだもん」

みゆき：「やうですか。確かに夜型の人には、朝はつらいですから
ね」

かがみ：「こなたって、頭ぼつさぼさの口もあるしね。ぎりぎりまで寝てるんでしょうけど。女にとつて髪は大切なんだからね。ぼ
さぼさの髪の美人より、髪のきれいな普通な女の子のほうが男受け
だつていいんだから」

「なた：「私は元気ではないから。バイトの時はひょんとすればいいし。かがみは男受けしたいって思ってるの？」

かがみ：「わいやねえ。でも今はまあここにかな。」（おひらとみゆを見る。みゆき、ヒーリングと笑つ）

「なた：「まあ、これから夏休みだしね。恋の一つや一つしてみてもいいかもね~」

かがみ：「（からかいつゆに）あなたはすうと部屋に隠しきるでしゃうから、そういう機会なんていんじゃないじゃな~？」

「なた：「わあ、ヒーリングねえ~（思わずぶつぶつ言つ）」

かがみ：「（すい）べびつべつして） もちがそつこう相手がいるのか
！？」

つかさ：（ええつ、そんなつ、）なちゃんのくせに～

こなた：「いや～、いないけどそ～。でも恋愛なんてネットゲーム
でもできるじやん」（その発言を聞いて、つかさ、ほつとすむ）

かがみ：（ドン引きして）「完璧にあなたの世界の側の人間の発
言だわ。それ」

こなた：「いやいや、最近はミクシィとか、モバゲとかほかにもネ
ットゲームでもそうだけど、実際にオフ会とかで会つてそのまま付
き合つて『ホールイン、つていつのもよくある話だよ～』

つかさ：「（頷いて）あ～、私も聞いたことあるよ～。やつこつこ
とがあるんだつてね～」

かがみ：「ふ～ん」

こなた：「まあ、機会があればかがみもやつてみたら～～よ。それ
よつせ、早く帰るつよ」

つかさ：「そだね」

かがみ：「そつするか～」

みゆき：「やうですね」

（4人で学校の外に出る。外は晴天。下校する生徒たちも多い時間
帯。）

かがみ：（空を見上げて）「しかし暑いわね～」

こなた：「まあ、夏だしね。日差しが強烈だよね～」（手をかざし、
田を細めながら
太陽を見る）

みゆき：「わたしあは肌が弱いので、あまり強い日差しあは苦手なんで
す」

つかさ：「あ～、みゆきさんそんな感じがするよ」

こなた：「みゆきさんはお嬢様だからねえ。やうだ。ちよつとコン
ビニによつてもいい？」

かがみ：「いいけど」（全員うなづく）

（4人、コンビニに入る）

つかさ：（田をつぶつて、制服をつまみ、ぱたぱたさせらる。）「う
わ～、涼しいね～」

みゆき：（うれしそう）「本当にですね」

こなた：（そんな様子を見た後）ちょっと待ってね

かがみ：（立ち読み用にトマガガイドを手に取り、田を通しながら）
何、雑誌でも買うの？」

こなた：「違うよ。ウェブマネーだよ」

かがみ：「ウェブマネー？」

こなた：「そりゃう。ネット上で使えるお金だね。ネットで買い物するときはこれで支払いするんだよ」

かがみ：「あんた、ネットで何か買い物するの？」

こなた：「うん。ネットゲームのアイテムだよ」

かがみ：「アイテム？」

こなた：「そう。今日から夏休みでしょ。ネットゲームの運営会社も稼ぎ時みたいでさ、色々

とサービスしてくるんだけど、その中に経験値が2倍とドロップアイテムが2倍になるサービスがあるんだよ。そのアイテムを持つていれば、なんと経験とドロップが2倍になるんだよ。まあ、効果は3日だけだけね」

かがみ：「へへ。じゃあその3日間はできるだけゲームしたほうがいろいろとこなってことね。あんたにぴったりなアイテムじゃない。」

「

こなた：「う。だから私は今日から3日徹夜するつもりなんだよ

ね～」

かがみ：「ひょっ！あんたね、なに馬鹿なことこなってるのよ。体壊しちゃうでしょ～」

こなた：「ここや。前も3徹したことあるけどだいじょうぶだった

よ。・・・ただ、4日目は

丸々24時間寝てたみたいで、起きたら5田田になつてたけどね

かがみ：「（苦笑いして）ああ・・・あのときか。3徹目のあんたの顔、相当ひどかったけどね。」

こなた：「まあ、夏休みだし、誰にも会わないし、多少ひどい顔になつても大丈夫かなつて」

つかさ：「でも、いくらなんでもそれはきつこよ～。なんかテレビのニュースでもゲームで何日も起きて死んだ、って言う人の話も聞いたことがあるし・・・やめたほうがいいんじゃない？」

みゆき：「そうですよ。皆さんのがつております。そもそも人間の体は寝ている間に疲れをとるようになりますよ。それから寝ることによるストレスの解消などもありますね。そして生活リズムの形成にも睡眠は役立っています。同じような時間に寝て同じような時間に起きる。というリズムですね。食欲、性欲、睡眠欲は基本的な欲求ですし。無理して3日徹夜して、その後体を壊して、2週間寝込みましたということもありうる話ですよ。そうなると、せっかくの夏休みを無駄にすごしてしまうことになりませんか？体も壊して高校最後の夏休みも無駄に過ごしたでは悔やんでも悔やみきれないですよ。」

こなた：「（汗をかきながら）ううつ。みゆきさんが言うと説得力があるねえ。それはわかるんだけど、3日間限定のアイテムだから、ちょっとでも使っておきたいしな～」

かがみ：（呆れ顔で）「あんたさあ、そんなに経験とかレアアイテ

ムがほしいの？」

こなた：（そんな風に聞かれること自体想定していなかつたといわんばかりの

意外そうな顔で）「当たり前じやん。他の人が持つていないアイテ
ムをゲットできるんだよ。（顔を近づける）レベルが高くなれば、
今までいけなかつたエリアにもいけるんだよ。（さらに顔を近づけ
る）周りからもうらやましがられるんだよ。（さらに「よ）それを
装備している人は鯖に自分しかいない、というふうになるかもしれ
ないんだよ。（さ「よ）そのうえ、強くなるから殲滅速度も上昇す
るんだよ。（「よ）「プレイになつたら絶対に役立つじやない。そ
れは欲しくなるよ」

かがみ：「ちよつ、わかつたから、そんなに近づくなつ。」

こなた：「むらつと來た？」

かがみ：「来るかつ。私にはネットゲはわからないけど数字の増え方が大きくなるだけでしょ。そんなことで一喜一憂するなんて私にはわからないわね。」

こなた：（ちよつとからかうよつな表情を作る）「そうだろうけど、かがみんだつて体重の増減で一喜一憂してゐるじやん。数字だよ。体重だつて。」

かがみ：「・・・ううつ。痛いところをつくな。とにかく・・・3徹なんて体に悪いんだし、あんたが倒れたりしたら私たちも迷惑するでしょ。お見舞いに行つたりとか。みんなで遊びにいくはずがいけなくなつたりとか。だから無茶はしちやだめだからね」

こなた：「ああ、今のせりふ、惜しいなあ。微妙にシンゲ的な感じ。・・・みんなに心配をかけるよつなことはしなこよ。」

つかさ：「本当だよ。」

みゆき：「お願いしますね。」

こなた：「ああ。こんなにいい友達を持つて、私はなんて幸せ者なんだろ。・・・つてことでウェブマネー1000円分だけ買つてくるね。今日だけ徹夜で我慢するよ。」

かがみ：「（突つ込む）徹夜はするのか？」

こなた：（レジで支払いをします）「おまたせ。じゃあ行こうか。みんなはどうかよくなくていいの？」

かがみ：「私は大丈夫」

つかさ：「大丈夫だよ」

みゆき：「特にはないですよ」

こなた：「よし。じゃあ帰る。」

（涼しい「コンビニから、一気に外の暑さに戻る）

こなた、かがみ、つかさ、みゆき…「…………暑いね」「暑い…」「暑いね」「暑いですね」

（バスに乗る。それぞれが最寄の場所で降りていぐ。こなたも家に到着）

こなた：「ただいま」（リビングへ行く）はあ～涼しい～

やいねえさん：「こなた、おつかれ～」（手にはペールの缶を

持っている）

こなた：「ただいま。あれ、来てたんだ。仕事はどうしたの？で

が、昼間からお酒ですか、

ゆいねえさん……」

ゆいねえさん：「今日は有給をとつてゐから休みだよ～。休みくら
い飲ませてよ～。」

こなた、今日から休みなんでしょう？」

こなた：「やだよ」

ゆいねえさん：「学生はいいね～。（黙々をこねるよ）私も氣
楽なあのこりに戻りたいよ～。（ビールをぐいっと飲む）ふふあ～
～～つ、つまいつ……」

こなた：（呆れ顔で）「ゆいねえさんを見てたら、社会人のほうが
氣楽に見えるよ……」

ゆいねえさん：（焦り氣味に）「そんなことないよ～。社会人は大
変なんだから。」

そうじるう：（うなづいて）「そうだぞ、こなた。社会人は大変だ。
早く社会人になりたいなんていわづ、学校生活を楽しむんだぞ。お
父さんはな、こなたの制服姿をいつまでも見ていたいんだよ。それ
からこなたの友達が制服で来るのを見るのも楽しみなんだからな。」

ゆいねえさん：「あの……警察官の前でそういう危険な発言はや
めてくれませんか……？」

そ「うじる」・（汗・・・話を変えた）「そ「うこや」こなた、通知表を「

こなた：（思い出したようにかばんから取り出す）・「や「うだつた
ね。今日は頑張ったよ」

セ「うじる」・「どれどれ・・・なるほど・・・1 - 2 - 3 - . . .
と。これはPSPだつたな。（こなたうなづく。）よし、約束だ。
わかった」

こなた：（両手をあげて喜んで）「やた～」

セ「うじる」・（それを見て満足げに）「それじゃ今から貰いにいく
か。お父さんもPSPはやりたいゲームがあるんだよ。こなたと一
緒にな。（照れた様に鼻をかく）」

ゆいねえさん：「もしかして最近こでよくやつてる、モンスター
をハンターが倒していくゲーム？」

セ「うじる」・「そ「う。モンスターをハンターが倒すゲームだな。面
白うでや～。こなたとやりたいんよ～」

こなた：「あ～。モンスターをハンターが倒すゲーム、やりたいけ
ど今日は今からネットゲー
ムをやらなくちゃいけないから。明日行こうよ。」

そ「うじる」・（残念そ「う」）・「そ「うなのか？じやあ明日だな。」

「なた：「うん。わたしあ風呂入つてくるね～」（コジングから出る）

そうじゅう。「ああ、わかった。（こなたを見送りながら腕を組む。）・・・「うん、後姿まで「き妻に似てきたなあ。」

ゆいねえさん：「ううだね。」

やいじゅう。「あこつとはよく一緒に風呂に入つたりもしたなあ。こなたと一緒に風呂に入つたいくらいだ。」

ゆいねえさん：（またか、といつ顔で）「あの～。警察官の前で度々の問題発言は謹んでよ～。それより、旦那がねえ・・・（単身赴任でなかなかあえない旦那との話を再びやりだす。うそだつしながらも聞くそうじゅう）ついで、聞いてる？」

そうじゅう。「すまんすまん・・・ゲームのことで頭ん中がパンパンだった。」

（こなた、風呂でシャワーを浴びて出していく。短パンと大きめのトシャツとこうつ姿。）

こなた：（ぬれた髪の毛をバスタオルで拭きながら台所へ入る）「いや～。すつきりした。」

ゆたか：「あ、お姉ちやん。お風呂上がったの？」（台所でお菓子を食べてこる）

こなた：「あれ、ゆたかちゃん、帰つてたんだ。ちょっとすりつきつしてネトゲでもやひつかと思つてや。ゆたかちゃんもやる？」

ゆたか：（元気じて）「私はそつこのの悪くわからなにから・・・。お姉ちゃん、頑張つてね！（キラキラとした笑顔）」

こなた：「頑張るよひ・・・（しゃたつ、とキメポーズをしたあと、ジュークを冷蔵庫から出して）やれじやあこつてぐるね。（逃げ出すよひ）」

ゆたか：（怒残惜しがる）「こつてひりしゃいー」

こなた：（2階へあがりながら）「・・・ある意味駄目人間の時間つぶしのネトゲなのに、あんなきりきりした田で『頑張つてね！』なんていわれちやつたらお姉ちゃん、あの場所から逃げ出すしかないじやない・・・（ちよつとなみだ目で、ぐいっとじーじーを飲む）

(部屋に到着)

こなた：(パソコンの前に座る) 「ああ、早速はじめるかね。 . . .
ログインしてと . . .
(サーバーに接続できません、と) いつもメッセージが出る。 2度、 3
度繰り返すが、
結果は同じ。) あれ? もしかして . . . 臨時メンテナンスってやつ
か? ちよつとちよつ
と . . . 。」

(2つのゲームスレをチヨックする)

こなた：(どうやらメンテみたいだね . . . みんな怒ってるみたい
だね . . . 夏休みの初日から緊急メンテですか . . . 糞運営、ご苦
労です . . . もうこのゲーム引退しますね . . . 色々書いてあるね .
・ みんな怒ってるね~。まあ、引退する、って書き込みしてる人
が引退する』となんてないけどね)

(こなた、メッシが来ていることに気づく)

こなた：『れば』のゲームで一緒に狩をよくする『ホンだし』さん
じゃん。

ホンだし：「ちーす」

「な・」ちや

ホンだし・「帰つてたんだ。」

こな・「今日から夏休みだしね～

ホンだし・「うむ。つかメンテだな。」

こな・「こつまであるんだろ?」

ホンだし・「さあ。夏休みになつたら人が増えるくらい誰でもわかるだろ?」

ホンだし・「駄目運営だな。」

こな・「本当だね。今日から経験ドロップ2倍なのに。」

ホンだし・「そうだな。ドロップ2倍とこつひとま、これでこなに会つことができるかもというわけだな。」

こな・「またその話wまあ、せいや頑張つてよw

ホンだし・「頑張るも何も、運次第だしな。もう一回聞くけど、俺がラク剣ドロップしこなにプレゼントしたら、リアルで会つてデータできるんだな。」

こな・「まあ、そのときに気が向いたらね。つか、私がリアル男かも知れないのに。」

ホンだし・「それでもいいし。お前とは話が合つからな。復唱要求

つ！『ラク剣を
ドロップしてプレゼントしたら、ホンだしにリアルで会います。』
だつ！

「な……うみねこねタか……」ドショバ。赤で答えるよ。ハルジヤ
ないから。ラク剣を
ドロップしてプレゼントしたから、ホンだしひリアルで答こまか。（
黒い文字ですが、実際は赤で答えてこます。）これでいい？

「な：「どうした？」
ホンだし：「ログインできたわ。」

ホンだし：「んじやゲームでノシ」

「な…「あこね」

」なた：「やつとログインでわるか・・・」

（こなた、ゲームにログインする。）

(「なた、ゲームにログインする。）

「な：（クラメンに挨拶する）

クラメンA、B、C、D、E、F、G…「ねす」「ちかー」「ちかー」「ちかー」
「」「」「」「ちや（）・

・）」「いん～～」「いんちわ～」

「な：「おおっ、今日はみんな結構インしてるね。街も人が多いし。」

クラメンA：「経験2倍だしね」

クラメンB：「戻半も行きたいね」

ホンだし：「へ」

「な：「ノ」

（その他クラメン「ねす」とか「ノ」とか）

「な：「う」。ちとホンさんと狩行ってくるよ。」

クラメンD：「ラク剣？」

「こな：「だね。」

クラメン曰：「あ～、さつきこいつたけど張り付いてる人多かつたよ。」

ホンだし：「まだ鯖で持つてゐる人いないし、そのうえ時間沸きだからなあ」

「こな：「まあ、一回こいつてみよつて」

クラメン曰：「権利争いあつてよ」

「こな：「晒しに会わない程度にやつてくるわ」

クラメン全員：「へらへ」

（こなとホンだし、待ち合わせて、時間沸きボス部屋付近に到着）

ホンだし：「ドロップ2倍アイテム買った？」

「こな：「今アイテムモール開いてる、．．．買つた」

ホンだし：「おくわんじや行きますかwww」

「こな：「後ビのぐりこで沸く？」

ホンだし：「あ～、リアルあと10分だな。ちつと飲み物取つてくるわ

こな：「同じく」

（こなた、一階へ降りて台所からお菓子を取つてくる。再びゆたかから、がんばつてね！と笑顔で言われ、なんとも言えない気持ちになりながら、2階へ）

ホンだし：「おｋ？」

こな：「おｋ」

（バス部屋へすすむ。バス部屋で待機しているプレイヤーはいつも2～3倍の人数）

こな：「ｗｗｗ」

ホンだし「なにこれｗｗ」

こな：「こりゃ大変だねｗ権利取れるかな」

ホンだし：「わからんね。無理かもな。あのへんとか、有名キャラいるじゃんｗ」

こな：「神火力とINT神だねｗｗ厳しいな」

ホンだし：「まあ、こんなことあるつかと、一応火力うｐと速度うｐ買つてるから」

こな：「なるほどｗんじゃヒールは任せてね」

ホンだし・「ようこそそろそろか・・・」

(リアルでちょうどの時間。バス、出る。こなとホンだしのいる辺りに沸く。そのため、ほかのキャラより早くバスを削り始める)

こなた：「ちょ、幸先いいし、（左クリック連打。機を見てヒール。攻撃うロ魔法等をホンだしにかける。）

こなた：「なんか、いい感じかも・・・。バスがホンだしさんをタゲつたままってことは、

一番ダメとえてるってことだし・・・。ヒール間に合わない・・・。つ――！」

(そのとき、ホンだしにヒールをかけるマジシャンがいる)

こなた：「あれば・・・黒井先生のキャラつ――・助かる」

黒井先生のキャラ：「（内緒をこなたのキャラに送る）なんや～、泉。早速夏休み初日からゲ

ームかいな。色氣も何もないやつちやの～～（といいながらヒール、ヒール）」

こなた：「（ヒールが忙しくてあまり打てず）まあ、そんなどうです、（画面の前で、つか、

先生も初日からゲームじゃないですか、人のこと言えないですよ、と突っ込む）」

(20分後、バスを倒す。ドロップがこな、とホンだしに大量に降つてくる。)

ホンだし：「どうつぶWW」

こな：「うあWW」

(8種類くらいのドロップアイテムが降ってくる。その中にラク剣がでる)

ホンだし：「いやつたああああああああああああああつ」

「うそ……！」

(クラメンに報告。AA大量のお祝い)

魔法効果50%うん、
クラメンB：「そりや そうだろ。装備効果は・・・攻撃力50%、

クリティカル率85%うｐ・・・・・

クラメンシ：「ありえん」

クラメンB：「まだあるしW。攻撃速度50%う、HP増加+500・・・Wあと、これを装備している間だけ使えるスキルがあるみたい。MP半分使うけど、回避が3倍だってWWW」

ホンだし：「すうじいのゲットしたわ・・・」

（ホンだし、メニュー画面を開いて、いなに渡す）

「な…「やひりていいの?」

ホンだし…（内緒を送る）「その代わり、ちやんと約束まもってく
れる?リアルで遊ぶ?」とね。」

「な…「つへん…（アヒの前で腕を組む。しづらへして）判
つた。」

ホンだし…「じゃあ、明日でいい?」

「な…「明日?」

ホンだし…「朝10時から」

「な…「場所がわからないし」

ホンだし…「春田部駅はどう?」

「な…「あ~そこなら判るよ。もしかして関東の人?」

ホンだし…「そうだね。」（やつこつトレードを完了する）

「な…（しづらへた）「わかった。じゃあ明日、10時、春田
部駅で。一応携帯も
教えておくね。」

こなた：「やうこえれば黒井先生にお礼を言ひてなかつたな。よし、内緒を送りうつ・・・先生、ありがとうございました。おかげでレアモゲットできたし、死ななくてすみました。先生、今どこ・・・と」

黒井先生：「（じばらうじて）うちはこまクラシのメンバーと一緒に狩や。」

こなた：「わしき書いたかつたんですけど、先生もせつかくの夏休み初日から何やつてるんですか。色氣も何もないですね〜、と。」

送信する（）

黒井先生：「・・・ビーチから夏休み明け、泉だけ課題をたくさん出さないかんよ、うやな。自分でレアゲットしてからに」

こなた：「かんべん」

（その後はレアゲット記念のクラハン、圧倒的攻撃力と速さでメンバーの経験値もたまりまくる。）

こな・「もつ〇時か〜。明日ちよつと早いんで寝るね〜

クラメン：「おやすみ〜」

（翌日。晴天。こなた、リビングに降りる。）

こなた：「あ、お父さん、おはよー！」

そうじゅうひ…（マンガから顔を上げる）「あ、こなた、おはよー。
夏休みなのにはやいな。」

ては早速一緒にCDPを買いに行きたくなつたか。お父さんはいつ
でも準備おくだぞっ！」

こなた：「いやー、それがさ、今日買いに行こうと思つてたんだけ
ど、友達と遊ぶ約束が出来ちゃつてさー。」（あんね。お父さん。）

そうじゅうひ…（がっかりした様子で）「そうか。仕方がないな。あ
れだら？」「つもの双子の・・・」

こなた：「いいや。今日は男の子と遊んでくるねー」

そうじゅうひ…（大きく頷く）そうかそうか・・・男の子か・・・
ん？男だとあ～～～？（マンガをテーブルに落とす）のおおお

こなた：「だから言いたく無かつたんだよ。」（ひょっと迷惑そう）
（元）（元）（元）
そんなに心配しなくていいよ。ただの友達だし。」

そうじゅうひ…「（あせる）しかしだな、大事な一人娘が俺の知らな
い男と一緒に遊ぶのを心配しないわけにはいかないだろ。一体ど
ういう男なんだ？」

こなた：「（ため息をつく）別に普通の子だから。心配しないでい
いからね。あ、そろそろ時間だ。いつてくるね～～」（玄関へ向か
う。）

やうじゆうつ。「（立ち上がりて手を伸ばす）ちよつとまて、こなた。
・・こなた～～～～（両膝をがくつとつ。彼の周りの空気が
が真っ黒になる）」

ゆこねえさん：「（皿をひきつながら）おせよつ・・・朝から一体
どひじたの？大声出して」

ゆいじゆうつ…「（ゆいじつ顔を上げる。涙を流していく。）ああ、
ゆこねえさん…・・・こなたが、こなたが俺の手を離れてこつてしま
つたよ・・・・」

ゆこねえさん：「（がくくつとひなだれてこゆいじゆうつの肩に手
をかけて、ビールの缶を皿の前に差し出す）・・・付せゆつよ。今
皿せよ」と。休みとつてゐる」

やうじゆうつ…「うわああああああああああ（ゆこねえさんの胸で
泣く）

（外。暑さはそれほどもない絶好のトート田舎。こなたは、駅で
ホンだしがくるのを待つ。格好は短パンにTシャツと帽子。メール
でどんな格好で来るかは知らせているが、なかなか来ない。）

こなた：（時計を見ながら）「うへん。それそれ時間なんだけだなあ。」

ホンだし：（こなたの背後から声をかけぬ）「えーと、もしかして、こな？」

こなた：（振り返る）「うん、ホンだしゃん？」

ホンだし：「うん。俺がホンだしです。（えりうとすゑ）」

こなた：「おお～。予想したよつぜんぜんかつじこじゅん。いつもネトゲにインしているから、正直ピザーテかと思つたよ。（じざじざと見つめぬ。）

ホンだし：「なに言つてるんだよ。（照れる）俺、一応社会人だから。今日は土曜日だからね。」

こなた：「へ～。やうなんだ。（やうこつて隣にこつてしがみつく）身體どこのへりこ～？」

ホンだし：「一四〇分よこかな。」

こなた：「うちのおとつせんと回じへりこ～。高こね～」

ホンだし：「こなは低いね。どのへりこ～？」

こなた：「（じがみついたまま、見上げて）一四三だね。つむじが

みえるんじゃない？」

ホンだし・「お父さんは背が高いのにね」

こなた：「お母さんが低かつたからね。あんまり身體のことは聞かないでよ。」

ホンだし：「あ～、悪かった。体のことはあんまり言っちゃダメだね。胸がないとかさ」

こなた：「それは別にいいよ。（握りこぶしを作り）あえて言おう。貧乳はステータスであると！」

ホンだし・「（じぱらへりへ考える）まあ確かにそつかもしれないな。」

こなた：「う～ん、あれだけ会いたがってたのに、実際あつたら意外と静かだねー。もしかして私にがっかりしたとか？」

ホンだし・「え？いやいや、なんといつか実際に会うとなかなかうまく話ができるないというか、人見知りでさ。本当はジーク！貧乳！ジーク！貧乳！」位のことは言いたいんだけどね。」

こなた：（たくらみのあるような顔で笑う）「言つてるじゃん！人見知りだなんて前置きをしておきながら、普通に言つてるし・・・。でも、なかなか打ち解けるのが難しくて困つてるんです。ところがと？田那、そういう時は、共通の趣味ですぜ。」

ホンだし・（なるほど、と納得がいった顔になる）「そうだね。ちよつとアニメイトと、メロンブックスに行かない？それからそれほ

ど大きくはないけど、近くで同人の即売イベントがあるんだわ。」

こなた：「へへ。それは知らなかつた。まずそれ行こうよつ（手を
引っ張る）」

ホンだし：「ととと・・・そんなに急がなくても、逃げたりはしな
いって」

こなた：「（振り向いて人差し指を振る）ちっちっちつ。規模が小
さくても同人誌即売は早い者勝ちだよつ」

（二人、同人会場へ。その後、それぞれのお店で雑誌を見たり、ど
の絵師がいい、とかこのマンガがいいアニメがいい、という風に盛
り上がる。あとはこなたが持つてきたMP3プレイヤーを公園で座
つて一人で聞いたりする。基本はニコニコ組曲やアニメソング。それか
らゲームセンへ遊びにいくというパターン）

（楽しい時間はあつという間にすぎ、時間は夕方6時。ゲームセン
ターに入る。夏休みということもあってかなり人が多い。二
格闘対戦のところへ行く）

こなた：「（百円をペーンと弾き、キャッチしながら）私、格闘ゲームが得意だから、ちょっとやってみていい？」

ホンだし：「俺も結構得意だよ。」

こなた：「ほうねいひ。んじやちゅうと対戦してみよつか。（こなた、対戦台へ座る）」

ホンだし：「いいけど、ただ戦つだけじゃ面白くないな。こなが負けたら今日、家に泊まつてこいつのはどう？」

こなた：「え～～？いやらしく。（それほど嫌がらず）んじや、わたくしが勝つたら？」

ホンだし：「そりだなあ・・・」な、何かほしいものある？

こなた：「（間髪入れず答える）昨日出たヒロゲかな。初回限定版のフィギュアがなんと海洋堂がつくつたやつでね。ヒロインのなんだけど、ものすごく出来がいいんだよ。今回でるのは続編なんだけど、前作でも一番人気があつたキャラなんじゃないかな。でもその分結構高いよ？本当に大丈夫？」

ホンだし：「構わん」（ゲンドウ風に言ひ）

こなた：「じゃあやれやつ。ヒロゲ頂きます。」

(一) なたが対戦台に座ると、ギャラリーがわらわらと集まってくる

ギャラリーA：「おい、あの女の子・・・」

ギャラリーB：「おお、久しぶりにきたんだ。伝説のゲーマー少女Aだ・・・」

ギャラリーA：「す、じ、よ、な。あの子。相当このゲームをやり込んでいるはずだよ。（腕を組んで真剣に画面に見入る）なにしろ、今、このゲームでできるキャラのコンボはほとんどこの子が編み出したよ。うなものだからな。みんなそれを真似して、広がって行つたんだよ。」

ギャラリーB：「それはす、じ、よ、な。つ、て、こと、は、今日はもしかして・・・（ハクリ）」

ギャラリーA：「ああ。新しいコンボが見れるかもしれないな。一応携帯動画に取つておくか・・・」コニコニに流そう

ホンだし：（ギャラリーの声に耳を傾ける）「マジでか！・・・てことは勝てるわけがねえな・・なにしろ俺のコンボは全部人の真似だしな・・・だから自信満々だったのか・・・」

（その後、対戦スタート。ホンだしも格闘ゲーム好きらしい、確實にコンボを決めていく。しかし、一田の長がこなたにあり、2セットとられる。）

ホンだし：「なんとなくパターンは読めてきた。ただ、画面端に押し付けられるとちょっと厳しいな。（なんとかタイミングをずらしたり、ガードをしつかりして、2セット取り返す）よし・・・いるかも知れんな。」

こなた：「（ちょっとあせるが、久々に手ごたえのある対戦で興奮する）思つたよりやるね～。新しいコンボを試してみるかな。これはちょっとハメっぽいから、いつこうじてやりたくはなかつたんだけど・・・」

（ラストバトルスタート。こなたのキャラが浮かせを使つた後、コンボの連打。ホンだしのゲージを9割削る。ギャラリー、初めて見る超絶コンボに沸く。その後、勝負はこなたの勝ち。）

こなた：「よつしゃ～！（対戦者が入つてくるが、放置して荷物を持ち、立ち上がる。）いや～。意外とやるんだね～。まさかこの私をここまで追い詰める者がないようとは」

ホンだし：（しょんぼりと）「でも負けたしね・・・こなを家に泊めたかったな・・・ああ、悔しい。（思い立つて）よし、ラーメン食べにこいつ

こなた：「ラーメン？」

ホンだし…「やつ、悔しことをさせたラーメンだろ。俺がお“」ぬか！」

こなた：「悔しことをさせたラーメンって、初めて聞いたよ（笑）」

ホンだし…「そつかなあ…（落ち込む）」

こなた：（かわこううて思える）「そんなに落ち込まないでや。でも悔しいときはラーメンって…なんかツボに入つたよ…仕方ない。今日は一緒にいてあげるよ。」

ホンだし…「マジで…」

こなた：「（仕方ない、といつた風に）マジだよ。私もホンだしさんといふこと話して悪い人じやないつて言つのはわかつたし…その代わり、えつちなことはなしだからね。」

ホンだし…「もうひるん。えつちなのはいけないと思います。だからね。」

こなた：「うんうん。わかつてるね。もし手を出したら（人差し指を立てて、恐ろしげな顔をする）…死ぬよ。」

ホンだし…「（梅図かずおのタッチつぼく）ひいにいに」

こなた：「約束はちやんと守る」と

ホンだし…「約束？エッチなことはしないよ。」

こなた：「（いやいや、と手を左右に振る）そつちじやなくて、初回限定のやつ。（キララと目が光る）まだゲームショップ開いてるし。」

ホンだし：「……さすがだわ（財布の中を確認する）」

（ゲームを購入しにゲームショップへ。一人でエロゲ「ローナー」へいく）

こなた：「これこれ……やつぱり人気があるんだねえ。ほら、一番目立つところで平積みされてるよ。（手に取つてしばらく眺める）・・・いや～、いい仕事してるよね～」

ホンだし：「（平気な顔をしてエロゲを手に取る）こなたに小声で）こなは恥ずかしくないの？」

こなた：「（質問の意味がわからず）」、エロゲから目を離し、ホンだしに目を向ける。）え？ 何が？」

ホンだし：「いや、こりこりといつて女の子はほとんど来ないし、ゲームの内容がエロだし……」

こなた：「（ええぎつて）みなまで言つたな。……（真剣にホンだしを見つめる）・・・萌えを追求し、自分の好きなものを獲得するためなら、どんな場所でも平気なんだよ。それが男の生きる道つてやつさ。（ホンだし、女だる、と突つ込むがこなたは無視する）・・・・というわけで、これ。買うから。ポイントカードも持つてるから、お金だけ預戴。（そういうって手を出す。）」

ホンだし：「筋金入りとはこのことだな。・・・（つぶやいて、お金を渡す。こなた、軽い足取りでレジへ行く。）」

(ゲームショップを出る外はちょっと暗くなっている)

ホンだし：「こなが来るってことだから、ラーメンはバスだな。ご飯は自炊してるから、家で食べようか？料理は作るよ。」

こなた：「それは楽しみっ。今日は楽しかったな。同人誌も買ってもらつたし、マンガも買ってもらつたし、ゲームもゲットしたし、ホンだしさんは優しい人なんだね～」

ホンだし：「こなこそ、わざわざ来てくれるなんて、うれしいよ。」

(二人、電車に乗つて30分ほどで最寄の駅に着く。二人で並んで座るが、こなたは疲れ気味なのか、ホンだしに寄りかかるようにして直ぐに眠る。)

こなた：「（眠そうな顔で）電車は涼しくていいよね。とこうわけで・・・（親指をビシッと立てて）着いたら起こし・・・」

「

ホンだし：「（驚く）早つ（よつかかる）こなたの体の小ささ、暖かさを感じて、幸せな気分になる）・・・ま、いいか」

(じばらくそつして一人で寄り添つたあと、到着する)

ホンだし：「ここが俺の家の最寄り駅だよ。・・・（空を見上げる）雨降り出した？」

こなた：「（まだ眠そうな顔で）みたいだね～～・・・どりあえず、
行こ。」

（雨脚が突然強くなる。）

こなた：「（一人、駅の入り口へ行つて雨の降る空を見る）夏だからね～。暑さを払つてくれるのはうれしいけど、傘がないのが痛いよね。急いで帰ろ。」

ホンだし：「歩いて10分。」

こなた：「じゃあ走つて5分だね。急げ。せっかくの同人誌とか、マンガが濡れちゃつたら嫌だし。泣くに泣けないよ。」

ホンだし：「おしゃんじやダッシュで。」

こなた：「あいあいわ～～～Bダッシュね」

（家へ到着。一人ともずぶ濡れの状態になつている。）

ホンだし…「グッズが濡れなかつたのが奇跡だよね。」

こなた：「当たり前じゃん。自分が濡れても買ったオタグッズは守り抜くよ。」

・・・あれ？ ホンだしさん、服…？」

ホンだし…「あ…・・・（ブラが透けて見える）」

こなた：「もしかしてホンだしさん、女の子…？」

ホンだし…「う…（胸を隠す）

こなた：「男の子にしては声も高かつたし、なんか女の子みたいな肌をしてるとは思つたんだけど。でも背も大きいし、違うのかなって思つて」

ホンだし…「いや、俺は…・・・俺は男だよ」

こなた：「じゃあなんでブリウセてるの？」

ホンだし…「う…・・・それは…・・・俺はその、変態だから…・・・（なみだ田になる）」

（うなづいたとき、買い物帰りのお隣の奥さんが帰つてくる）

奥さん：「あら～今晚は～千奈美ちやん。今日はお友達と一緒に？」

ホンだし改め千奈美「…………あ、は、はい……」

奥さん：「あら～珍しいわね。それにお友達小さいわね～。」（「いや
つて並んでるとますます
大きく見えるわね……（しゃんとしつくる千奈美を見る）あら、
ごめんなさいね。」

千奈美：「…………いえ、私は……氣にしてないです。それじ
や濡れちゃって風邪ひき
そつなんで、失礼します。」

奥さん：「はいはい。暖かくするのよ～」

（二人、千奈美の部屋へ入る）

こなた：「千奈美さんなんだ～～」

千奈美：「うへ。…………」（めんつ。）

こなた：「別にいいけど……どうしてそんなつをついたの？」

千奈美：「だつて……ネットでは男キャラで通してたし……実
際でかくて男に間違われたりもする」

こなた：「そんなこと気にしなくていいのに……しかも自分を変
態呼ばわりしてまでかくそうとして……（雨に濡れて座っている
千奈美を見る）でもこりやつてちゃんと近くで見ると、本当に女
子だね。まつげも長いし……つていうか……ショートでむちや
くちや美少女じゃないか！……しかも美少女なのに自分のこと変態属
性の男と言い張るなんて……。眞実がわかったときの衝撃度はめ

がねを取つたら実は美処女でしたつていうギャルがよりも強じよ。
グッジョブ！千奈美ちゃん！！」

千奈美：「怒つてない？」

こなた：「せんせん怒つてないよーむしろこれが萌えだよー萌えー！
ーさむ、こんなところで
ショヅてないでお風呂にはいるよー一緒に入るつー！」

千奈美：「ええつーーー一緒に？？」

こなた：「もちろんだよ。早く入らないと風邪を引いたらやつでしょ。
一人いつぺんなら
びつちがが風邪ひいたりしないよ。」

千奈美：「うん。服大きいのしかないけどいい？」

こなた：「いい、いい。」

（ふたり、お風呂に入る）

こなた：「ああ、うらやましいなあ、背も高いでし、スタイルもいい
し」

千奈美：「（体を隠す）そんなことないよ・・・ちいさいほうが絶
対かわいいよ」

こなた：「萌えつーーー！」

千奈美：「（苦笑いする） わたしからわればっかりだよ、」
「なちやん・・・」

第22話 + りひかへりやんねる

(風呂からあがる)

「なた：「あ～すつきりしたね～」

千奈美：「やうだね～」

「なた：「千奈美ちゃんの部屋みていい？」

千奈美：「うん」

(部屋に入る)

「なた：「おお～～。私の部屋とおんなじ感じだね～。あ、ゲーム。」

千奈美：「うん。最近買ったんだ。ゲームでやった格闘の前のやつだね」

「なた：「んじゃゲームの続きをやりますか」

千奈美：「うそ」

「なた：「や～て、それじゃこれも負けたら罰ゲームとこせましょうぜ～」

千奈美：「なにこするの～」

「なた：「負けたほうは黙口一回勝者のわがままを聞く」」

千奈美：「ええ～」

「なた：「性的なわがままも聞かない」と黙口一回とひつよ」

千奈美：「私が負けるのわかつて……」なちやんのえつち～

こなた：「おおおお。それ。それこそ萌えなのだよつ。おじさんのツボをついてくるね～」

こんな感じでこなたの夏休みは始まりました。かがみ、つかさ、みゆきたちの夏休みもきっと思い出に残るすばらしいものに違ひありません。彼女たちに、幸多き夏を。

そんなわけで、らき すたの締め括りはこれになります。どうや。

あきら：「ひつき～ ちゃんねる～！（テーマ流れる）おはらつき～～～～～！～こ～、やつてきました。ひつき～ ちゃんねるの時聞です～。同会は私、『アイドルはトイレになんか行きません～』 小神あきらと、」

白石：「（緊張気味）「んばんみ、あきら様のアシスタントを勤めさせていただきます、『富士の樹海はもう勘弁！』 白石み～ええつ～～）でも、白石さん、なんかこれ、作者初の百合っぽい小

説らしいんですが、最後のほうは手抜き気味になっちゃつてますよ
ね～？あきら悲すい～～～（泣く真似）」

白石：「（唖然とした様子であきらを見ていたが、自分に振られて
気を取り直す）そうですね。手抜きといつたら読んでくれる読者に
対して失礼になりますから、私はそろは言いませんが、確かにちょ
つと焦り気味な感じはしますね。どうやらちょっと忙しかったみたい
でかなりばたばたと書いていたところ情報がありますね～。」

あきら：「（ぶりつゝじ）やっぱり～～、きちんとしたあ～、計画
つてえ～、大事だと思うんですう～。その点、作者がしつかりして
ないのが手抜きになつた原因かもしれないです～。私なんかはあ～、
この小説には一行も出でないですけど～、もし出たら、もつと作者
の筆が進むと思うんですよねえ～」

白石：「（うんうんと頷く）ええ。あきら様がもし出でいたら、必
ず完璧に小説は仕上げつていだしちゃうね。もちろん絡みの相手は
私、しらい～～～」

あきら：「（キレる。不細工になつて白石をしかる）あ～～～～ん
？絡みの相手は？誰？誰つて言おうとしたの？ねえ？その薄汚い口
から、誰の名前を出でつとしたのかなあ～～？」

白石：「（汗をかきながら、おそれ気味に）いや、ですから、やは
りあきら様がでるつてことは、やはり相手のキャラクターとしては
私・・・・

あきら：「（罵声を浴びせる）つぬぼれてんじやないわよ～（思こ
切り耳元で）」

白石：（つまつー耳が・・・・）

あきら：「（白石の顔を覗き込みながら）なに？ あたしの相手が、
言つに事欠いて

あんただつてえ？ 何言つてるの？ あのね、私はアイドルよ。仮にも
アイドル。

わかる？（白石、頷く）・・・何黙つて頷いてるのよ？（白石、ハ
イ、といつ）ちつ・・・たく、最近の事務所つて、こいつこいつちゃん
とした、当たり前の受け答えができるようなタレントを育ててない
わよね。（アイドルらしからぬものすごい悪い態度で）ま、いいわ。
とにかく、あんた、うぬぼれすぎ。仮に妄想の世界であるとしても
私に手を出せると思つてたの？ 私をどうにこうしようなんて、1万年
と2千年は早いわ。あんたなんかね、その辺にあるTENG Aで
も使って一人でオナニーでもしてりやいいのよつ！…」

白石：「（焦つて）あきら様、その発言はアイドルとして相応しく
ないかと・・・」

あきら：「（白石に向かつて吼える）うつさいわねつ！！何を発言
するかは私が決めるの！ そもそもこうじつ放送はね、アイドルに相
応しくない発言の部分はちゃんとカットしてくれるんだから。あん
たの薄ら馬鹿な発言と一緒にしないでもらえる？ まったく、これだ
から世間知らずのゆとりは・・あんたの代わりなんて・・・。（力
ンペ、時間切れを知らせる）あつ、

もう時間になつちゃいましたつ。もつともつと読者のみんなと楽し
い時間を過ごしたかったのにい～（かわいく泣く）そんなわけで
次回作があるかどうか、まったく不明なんですが、次回、またお目
にかかりましょ～。そのときはすし～く楽しいのができると思
います（はあと）じゃあねつ、ぱいび～（キララ・・・）・・・

第22話 + らつめーちゃんねる（後書き）

そんなわけで終わりました。一応夏らしい話にしようつとがんばったけど難しかったです。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

もし良かつたら感想など聞かせてもらえたならうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7560f/>

らき すた～夏休み前の話

2010年10月10日05時25分発行